

つての対面営業が復活してくる。世の中から一度消えても、技術革新を経て形を変えながら復活するものは実はたくさんあります。

私は現在不動産会社を経営しているのですが、その立場で都市や地域の未来をいつも考えています。ひとつの極には、あらゆるインフラや機能が高度に進化を続ける先進の巨大都市があるでしょう。そしてもう一方には、ヒューマンスケールの居心地の良いまちがある。例えば東京の吉祥寺駅の北口にはハモニカ横丁という一画があって、混沌とした細い路地の中に 100 軒近くの店舗が並んでいます。人と店、人と人が心地よい刺激を与え合って、そこにいるだけで楽しくなるようなまち。小樽が志向すべきは当然後者です。

人口が減少して、それに伴って生産労働人口がぐんぐん減っていく日本。まちには空き家も増えています。そして超高齢化がいつそう進んでいる。また、経済成長がとうに終わったこの社会ではもはや終身雇用というシステムが成り立たず、一方で人手不足、人材確保が困難を極める分野があります。しかし私は、こうした負の要因にただうなだれているわけではありません。このような逆風は見方を変えれば、「住宅はいま超買い手市場になっている」し、「一人あたりの床面積が増えている」。「単身者の増加」「個人事業主の台頭」があり、仕事の現場には「ワークシェアリング」という選択もあり、「家とオフィスの境目がなくなる」と、「家を複数所有する」人も増えていく。

「画一性」の時代。同じものを効率良く大量に生産していれば良かった時代はとうに終わっています。これに対して現代は、「多様性・独自性」の時代です。モノによる豊かさがひととおりに行き渡り、インターネットなどであらゆる情報に自由にアクセスできる現代では、他者との違い、つまり多様性や独自性がその価値になります。この時代では、やがて巨大な変化につながるような小さなゆらぎがたくさん起こっています。重要なのはそれを見逃さないこと。

リーマンショック（2008 年）も、直接のきっかけはアメリカの片田舎の住宅バブルがはじけたことでした。あるいはスティーブ・ジョブズが世界をどう変えたか。グーグルのセルゲイ・ブリンとラリー・ページが新しい検索エンジンを開発したことで、その後世界はどうなったか。その時点ではみんな小さなゆらぎに過ぎませんでした。私が強調したいのは、ゆらぎを起こすのもそれを見つけるのも、結局は「人」である、ということ。「10 年後になくなる仕事と残る仕事」という有名な研究がありましたが（英オックスフォード大学マイケル・A・オズボーン）、これからの社会に求められるのは、独自性を持った多様な人々です。彼らは、それまで眠っていた人の力までを掘り起こすことができる。

○苦悩の渦中でこそ人は学ぶ

世の中の画一性から脱して、自分が特徴のある独自の存在になるためには、どんな方法があるのか。どんな努力をすべきなのか。個人でも組織でも、「どんな未来を目指すかという理想を探求して、それを周囲に語り続ける」こと。そのことが、まわりに良い影響を及ぼして、やがてそれが連鎖反応によって組織や地域、あるいは国までが輝いてくはずです。その一歩として私は、「商大生よ、海外に出でよ」と呼びかけます。海外で優れた人たちとたくさん出会って、国内では味わえないような刺激を受けてください。異文化を背景とした優秀な人たちと仕事することほど、自分を高めてくれる機会はありません。

私が 38 歳のとき、北海道拓殖銀行が破綻しました。マーチャントバンキングの仕事に熱中していた香港から帰国して 1 年後のこと。そして人事課長として行員たちの次の職場づくりに取り組んだのですが、当時は苦しくて天を仰ぐような毎日でした。眠れない日々が続きました。でもいま私は、「あれはすばらしい苦勞であり学びだった」と自信をもって言えます。人間が人生でいちばん成長できるとき。それは実は、苦悩の渦中にある日々なのです。どんな人でも逆境の中でもがくときがあります。でもその経験こそが、自分を成長させてくれる。いま皆さんは実感としてはわからないでしょうが、どうぞそのことを覚えておいてください。きっと思い当たるときが来ます。拓銀のあと私は、北海道放送、NTT ドコモとちがう分野の道を歩んで、現在は不動

産会社を運営しています。もし私が、英語や中国語の勉強もせず、海外で仕事をする経験も持てなかったら、こうした転職はできなかつたでしょう。世界やビジネスを幅広い視野で考える習慣もなかったと思います。後輩の皆さんに、私のそんな仕事人生が何かのヒントになることを願って講義を終わります。

エバーグリーン講座 U30 「10年後のジブンを描く」

○「北海道の観光に新しいビジネスの渦を起こしたい」

篠村 恭太氏（平成 25 年社会情報学科卒／合同会社 ToGo 代表）

私は昨年（2017 年）の 2 月に、ゲストハウスを運営する会社を立ち上げました。今日は 3 つの切り口から自己紹介をします。商大時代の自分は、英語と経営をしっかりと学ぼうと考えていました。しかし 4 つのサークルを掛け持ちしたり、塾講師のアルバイトに熱中したり、勉強よりも学生生活自体を満喫していたと思います。そして、満喫するあまり就活に失敗しました（笑）。だから切り口のひとつは「挫折」です。いちばん入りたい会社に入れなかった私は、次の志望企業（旧財閥系の金融企業）に入ったのですが、たったの 7 カ月でやめてしまいました。企業カルチャーにどうしても溶け込めなかったのです。東京から札幌に戻り、ニート状態になりました。2 カ月くらい友だちの家を点々としました。いちおうお礼として彼らのために炊事や掃除はしたのですが、あるとき、「お前は喰って寝るだけで、まるでう〇こ製造機だな」などと言われてしまいました。これはさすがにこたえて、なんとかしなきゃ、と立ち上がりました。そして会社を作ったのです。

キーワードのふたつめは、「0→1」。ゼロの状態から新しい何かを作り出す。それが「0→1」です。私は、ゲストハウスを運営する ToGo という会社友人とふたりで起業して、まず札幌駅の北口に「Wagayado 晴-HaLe-」という宿を作りました。ゲストハウスは、いま日本で 1500 軒くらいあると言われていています。インバウンドの観光客にとっても人気で、旅行者同士が気軽に出会える場づくりを意識した、素泊まりの簡易宿泊所です。今年の 3 月には函館の湯ノ川で、ライブハウスと組み合わせたユニークなゲストハウス、「TUNE」をオープンさせました。元手にはクラウドファンディングの手法も活用しました。どちらも既存の建物をリノベーションしたもので、函館の宿は楽器の一部やレコードをインテリアに使ったり、自分たちのさまざまなこだわりやアイデアを駆使しています。

そして三つめのキーワードは、「変化」。実は函館のゲストハウスは、この 9 月に建物のオーナー企業に譲渡しました。私たちが立ち上げたビジネスが軌道に乗ったので、先方はこれからは自分たちでやる、となったわけです。札幌のゲストハウスも、手ごたえを感じた上で、来年（2019 年）1 月に閉める予定です。じゃあ次はどうするか？ ふたつあります。まずひとつは、いま商大の猪口純路先生のゼミと協働で、小樽市緑 1 丁目にゲストハウスを開業する準備を進めています（2019. 3 月予定）。そしてふたつ目。私はこれから、ゲストハウスや飲食店を立ち上げる人のサポートをする仕事をしたいのです。そのための会社をもう少しで立ち上げます。コンセプトは、「北海道×観光×IT」。若いエンジニア 3 人を抱えて、生まれ育った北海道の主要産業である観光の分野で、新しい取り組みをいろいろ起こして行きたいと考えています。

○進路を決めた、1 年生で出会った特別講義

織田 開智氏（平成 26 年経済学科卒／日本マイクロソフト株式会社）

私は札幌出身で、中学高校ではサッカーに熱中していました（いまでも東京のチームでプレーしています）。商大時代にいちばん熱く取り組んだのは、ゼミです。学科がちがう近藤公彦先生のゼミで、代表も務めました。

1年生のときに東日本大震災が起きました(2011.03.11)。何かしなければ、という思いに駆られて現地に行って、小樽で支援の団体を立ち上げたりしました。また学内の国際交流サークルでも活動しました。マイクロソフトの日本法人に入ろうと思ったのは、1年生のときにさかのぼります。世界を代表するIT企業の日本のリーダーの方たちが商大に来た特別授業があって(商大百周年記念事業「ITサミット」)、強烈な印象を受けたのでした。現在外資系IT企業に勤めているといっても、私には留学経験もプログラミングの技術もありませんでした。自分の興味を惹くものがあつたなら、とにかく何でもやってみよう。何とかなるさー。子どものころからそんなことの連続だったので、いまの自分があると思います。英語は、国際交流サークルの場で、自分からどん欲に吸収しました。

いまの仕事のことを話します。皆さんGAF(A)という言葉を知っていますか? Google、Apple、Facebook、Amazonの頭文字を取ったもので、いま世界の経済を動かしているといっても過言ではない4つの企業です。4社に共通するのは、単なるモノや情報の生産ややり取りに留まらず、「顧客との接点がとても多い」ということ。彼らは、スマートフォンやOS、AIスピーカー、SNSなどからビッグデータを集めて、世界経済のエンジンを動かしている、いわゆる「プラットフォーマー」なのです。マイクロソフト社は、残念ながらこの流れに乗り遅れてしまいました。今となってはそのことがよく分かるビル・ゲイツ(創業者)の言葉があります。創業時の彼のビジョンは、「すべてのデスクとすべての家庭に一台のコンピュータを」、というものでした。1980年代にマイクロソフト社は、WindowsというOSやWordやExcelといったパッケージになったソフトウェアで、ビジネスや人々の暮らしを大きく変えました。これはインターネットで世界が繋がる前のことで、彼らは結果としてその成功に依存しすぎました。GoogleやAmazonといった新興企業は、インターネットを舞台に立ち上がったのですから。マイクロソフト社の現在のCEOサティア・ナデラはこう言っています。「我々は地球上すべての個人とすべての組織がより多くのことを達成できるようにする」。ひとことで言うと、人々をEmpowerする会社だ、というわけです。私たちは、AIやIoTの分野を軸に、プラットフォーマーの4社と伍していこうとしています。

入社して2年間は、マイクロソフトのプロダクトを扱ってくれる代理店さんと取引をする部署(パートナーセールス)に配属されました。クライアントは自分よりずっと年上で、パッケージになったソフトウェアを長年扱ってきた企業の方々。そんな皆さんは、Windowsが5、6年に1回メジャー・アップデートされる機会を最大の商機と位置づけてきました。でも近年のマイクロソフトのビジネスは、クラウドによるサブスクリプション・モデル(期間設定の定額制)に替わっています。現場ではその摩擦に苦労しました。現在は、中・大企業向けにAIやIoTを活用したコンサルティング営業に取り組んでいます。外資系大手企業の文化として、3つの要素が上げられると思います。「多国籍」「自由」「規律」です。毎年アメリカで社員総会が開かれますが、世界中から3万人くらい集まってワイワイ楽しみながら交流します。働き方も自由で、オフィスに自分の席は決まっていませんし、始業終業の時間も個人任せ。毎日出勤する必要もありません。そしてその上でいちばん重要なのは、規律(Discipline)。グローバルで自由な空気の中でのびのび働けますが、アウトプットは厳しく求められます。営業成績はほんとに事細かに可視化されて、上司からのプレッシャーも時に尋常ではありません。

○「国際開発学を学びたくて本場のイギリスへ」

佐々木 葉子氏(平成26年社会情報学科卒/北海道総合研究調査会)

私はいま、札幌のシンクタンク、北海道総合研究調査会(HIT)に勤めて2年目です。商大時代は、木村泰知先生のゼミが立ち上げた(株)SEA-NAで活動しました。部活は、高校の時から続けた女子ハンドボール部。3年生のときにキャプテンを務めて、全道一になって全日本インカレに出場したことがちょっと自慢です(笑)。

札幌ドームでカレーを売ったり、ホテルの宴会場で配膳をしたり、アルバイトでも忙しい学生生活でした。私の卒業後の針路は、前のおふたりと少しちがっていました。イギリスの大学の大学院で、国際開発学という学問を学びました。イギリスは、国際開発学の発祥の国です。

最初から留学をしようと考えていたわけではありません。就活をはじめた3年の冬、私は海外と深く関わる仕事をしたいと思っていました。セミナーなどに出席して情報を集めたのですが、その分野の日本の会社に入社できても、海外に行けるのは7年目くらいにようやく出張で、なんていう話を聞いて、これはダメだ、と思いました。それならば留学しよう！と決めました。日本で就職する前に、海外で暮らして勉強しようと思ったんです。

日本からの海外留学には、大学間の交換留学とかいくつかの方法があります。そして1年か2年間休学して留学して、もどって復学して、日本の大学を卒業する人が多いようです。でも私は、帰ってきてからまた卒論と格闘したりするのはきついな、と思いました。ですから商大を卒業してけじめをつけてから、国際開発学をイギリスで学ぼうと思ったのです。そのために最適な大学を調べて、3つを選びました。それが4年生の夏くらい。必要な書類（志望理由書・英語の試験・推薦書など）を用意して、4年生の初冬に提出します。でも合否がわかるタイミングが商大の卒業式の直前になって、落ち着かない日々でした。幸い3つの大学とも合格して、その中でレディング大学（University of Reading）に決めました。日本人が比較的少ない大学で、ロンドンから電車で30分弱くらいのまちの、広大な緑の中にある伝統校です。2015年の6月に渡英して、まず10週間の英語プログラムを受けてから、9月に入学。イギリスの大学では1年間で修士が取れます。とてもハードでしたが、充実した1年間をおくることができました。

国際開発学という学問は、世界の貧困や格差の是正や、ジェンダー、人権などを総合的に探求するもので、19世紀の欧米の帝国主義が20世紀に至って生み出した、比較的新しい社会科学の一分野です。レディング大学にはいろいろな背景を持っている学生が世界から来ていました。少人数で進められる授業では学生と教授の垣根が低くて、アフリカから来ている学生たちの自己主張の強さに驚いたり、日本ではできない学びを体験できました。日本の大学は入るのは難しいけれど出るのは簡単。対して欧米の大学は…、という言い方がよくされます。これは本当にそうでした（笑）。統計データや論文と格闘しながら英語による読み書きとディスカッションの1年間。毎日が必死でした。一方で、寮生活の仲間たちとパーティをしたり、休日には旅行もして、貴重な時間を有意義に暮らせたと思います。自炊や節約など、生活力もずいぶん鍛えられました。

2016年の9月に帰ってきて、10月から就活に入りました。学んだことを活かしながらさらに成長できる環境を求めた中で、いまの北海道総合研究調査会というシンクタンクに就職しました。皆さんには馴染みが薄いかもかもしれませんが、シンクタンクとは、社会のいろいろな問題や課題について調査研究を行って、政策への提言などをする公共性の高い機関です。入社して私は例えば、札幌市が取り組む「女性が輝くまちづくり」に関する調査・検討の仕事をしました。データの整理からはじまり、市民のグループインタビュー、市長と市民との意見交換会の運営や、関連会議の企画・運営、先進事例の視察などをチームの一員として行い、レポートを作りました。ちなみに触れておきますが、札幌は、性比（女性百人に対する男性の数）が政令市の中で最も低い87.4で、小樽はさらに低い82.1。にも関わらず札幌では女性の未婚率が高い。一方で就業時間のデータを見ると、札幌の男性は全国平均よりもかなり多くて、つまり札幌では女性が引く手あまたのはずなのに男性が忙しすぎて結婚するカップルが増えづらいのかな、という状況が見えてきます。

私のキャリアが皆さんの参考になるとしたら、進学や留学という選択肢もあるんだ、ということだと思います。選択肢を幅広く見渡して、まわりの動向に影響されすぎないことも大事ではないでしょうか。中学校のとき私は友だちから、「葉子はGoing my way」だよ、と言われてたことをよく覚えています。自分がどうしても進みたい針路が見つけられたら、Going my wayでいいんじゃないでしょうか。私はこれからもそうして自分のキャリアを積んでいきたいと思っています。

◎おわりに

エバーグリーン講座は、現役の商大生が卒業生のキャリアに触れることができる貴重な機会であり本学のキャリア教育の中心的な科目のひとつです。登壇していただく講師のみなさまは、実際の仕事内容や業界の最新情報を紹介しつつ、ご本人のキャリアの変遷とその節目における大小の決断、その決め手となった具体的な事例や長い社会人生活を振り返って獲得した職業観、人生観といった多彩な話題にも触れていただき、毎回講師の職業人生が凝縮されたエキサイティングな90分間を味わうことができます。本稿の狙いはそれらの講義の随所で講師が（ときに無意識に）例示する社会人基礎力の具体的な実践と発揮、およびそれらにつながる背景と文脈に焦点を当て「先輩たちの豊かな職業人生から社会人基礎力を学ぶヒント」を示すことにあります。

元号が令和になって初めての就職活動に臨む商大生たちは、オリンピック／パラリンピック東京大会の影響に加え、未知の感染症への対策などで社会全体が言い知れぬ不安に満ちた中で、一人ひとりが自らのキャリアの未来に向き合っています。産業構造やビジネスモデルが急速に変化し5年後ですら見通すことの困難な現代に、先達が歩んできた長いキャリアの中で磨かれてきた時代を超えた仕事の本質、人生の岐路における究極の選択、多くの出会いの中で築いてこられた人脈という財産などエバーグリーン講座が伝えるものは、受講生にとって暗闇の中の一筋の光となっているに違いありません。

なお、本稿の素材となった平成30年度エバーグリーン講座の講義録も過去5年間に引き続きライターの谷口雅春さんに作成していただきました。講義期間中は毎週小樽まで通ってすべての講義を聴講していただくことで、講師たちの想いと現役学生との心の交流を汲み取り素敵な言葉にまとめ上げていただきました。ここに記して謝意を表します。